



少年と指輪

— Boy And Ring —

原作：カント
AUTHOR KANTO

イラスト：水上二十歳
ILLUSTRATION mizukami hatati



©
DrawingWriting



少年と指輪

— Boy And Ring —

原作：カント
AUTHOR KANTO

イラスト：水上二十歳
ILLUSTRATION mizukami hatati

© DrawingWriting

少年と指輪

— Boy And Ring —

© DrawingWriting

原作：カント イラスト：水上二十歳

1. 「それから、半年後」
2. 「それから、四半週」
3. 「それから、一ヶ月」
4. 「それから、一昼夜」
5. 「それから、半日後」
6. 「それから、四半分後」
7. 「それから、半時間」
8. 「それから、数分後」
9. 「それから、数秒後」
10. 「それから、四半時間」
11. 「それから、十数分」
12. 「それから、数百秒」
13. 「それから、三四半時間」
14. 「それから、数分」
15. 「それから、数十秒」
16. 「それから、それから」

第一話「それから、半年後」

始めに、何か重い音がした。石造りの彫像を大地に倒したような、そんな音だ。

普段であれば、そんな物音など、彼女は気にも留めなかっただろう。邸内のメイドが家具を動かすように指示されたのかも知れないし、或いは単なる空耳かも知れない。受け止めたものは、その程度の微弱なものでしか無かった。

にもかかわらず、彼女が絵筆の先をパレットから離し、視線をキャンバスから上げたのは、傍らで寝そべる真つ白な狼の耳が、ピクリと、何かを感じとったかのように動いたからだ。視界の端に捉えた極めて微々たるその動作は、しかし彼女に『何か』があったと知らせるに十分だった。「アーニャ先生？」

寝そべる狼にもたれかかり、すうすうと寝息に近い呼吸を奏でていた少女が、怪訝そうにこちらを見上げる。が、その先を人差し指で制止し、耳を澄ました時、彼女は確かに聞いた。

怒号だ。微かだが、屋敷の門の辺りから聞こえる。



「ミーネ、こいで——」

待っていて、と放とうとした次の瞬間、火薬でも炸裂したかのような轟音が響いた。屋敷全体がグラグラと揺れ、傍らの少女が小さな悲鳴を上げる。それを咄嗟に抱き寄せた途端、今度は先程よりも数段大きな、そして明らかな警戒の色をはらんだ怒鳴り声が、吹き抜けの中庭を突っ切ってきた。

「部屋に戻って！ 鍵も閉めて隠れてなさい、いいわね！」

事態の異常さに、アーニヤは早口でそう告げ、立ち上がった。金色の豊かな髪を混える少女からの、不安そうな視線を受けながら、「ミーネをお願い」と狼へ言い放ち、返答を待たずに駆け出す。目指すは、中庭を挟んだ真向かいに位置する、正面玄関ホールへの扉だ。

掃除の行き届いた円形の回廊をひたすら進む最中、外からの怒号は繰返し響き、その上、更にもう一度、今度はより大きな衝撃と破壊音が轟いて、彼女はよろける体を強引に前へ押し出さなくてはならなかった。それでも何とか、白塗りに焦げ茶色の装丁の施された、頑強な両開きの扉を押し開けたが、その途端、彼女の体は凍りつく。

玄関ホールもまた、円形だ。ドーム状の天井、現在地から一階へと至る回り階段、柔い弧を描くエントランス。その床一面には、天使の戯れる楽園の絵画が描かれているはずだったが、いま、それらは一切、アーニヤには視認できない。エントランスから左右へ伸びる、一階の各部屋へ伸びる廊下も見えない。

天井の高いホールの壁面、正門へと続く一際大きな両開きの玄関扉、その左側。そこに今、一筋の、巨大地割れのような割れ目が出来上がっている。それと対応するかのごとく、回り階段の左手がポロポロに崩れており、舞い上がった粉塵が、喉に呪いのように貼り付いてくる。息苦しいほどだ。思わず顔をしかめ、口元を右腕で覆った彼女は、無残に崩れた周り階段の中に、何やら真つ黒なものを見つけた。目を凝らすと……。

「……正門？」

彼女はただ、首を傾げた。この屋敷の正面を護る、黒く硬く、筋骨隆々の男達が数人掛かりでも持ち運びに苦勞するような鋼鉄製の門扉が、何故に屋敷の回り階段で粉塵などくゆらせているのか。化け物でもやってきて門をもぎ取り、屋敷に投げつけたとでも言うのだろうか。

「アーニヤ君！」

ふと、階下から、低く、野太い声が彼女を呼んだ。見ると、玄関ホールの右手、執務室へ連なる通路から、どこか見覚えのあるシルエツトが、こちらに手を振っている。

「デニツさん？」

「やはり君か！ 無事か！ 娘は！？」

ミーネなら部屋に戻ってるわ、と声を張って、アーニヤは回り階段を降り始めた。細かな瓦礫が靴の下で転がり、埃の臭いが鼻をつく。左側、崩れた方の回り階段から階下にかけては、大小数多の瓦礫の山が出来上がっているようだ。シンプルで美しかった玄関ホールが、このような見

るも無残な光景へと塗り替わろうとは、この邸内の誰が想像出来ただろう。

「何なんです、これ！ 外で何があったの！？」

「私も知らん！ 手伝ってくれ、扉が開かんのだ！」

長いスカートが瓦礫に引っかかりからないように注意しながら進む彼女は、粉塵の中、ようやくこの屋敷の主人、デニンの姿を捉えるに至った。肩幅は広く、顔に溝のように走る幾重もの皺とアンバランスにガツシリとした体軀は、アーニャよりも一回りも二回りも大きい。その体軀に見合うよう、恐らくは特注で作ったのだから上等な白いシャツ、革のベスト、ビジネス用の深い藍色のズボンが、今は見るも無惨に煤けている。外からの怒号は絶えず、のっぴきならない事態が起きているのが確実な最中、それでも「高そうなのに勿体無い」などと薄っすら考えている自分が居て、アーニャは自らに呆れた。

「扉が開かないって——」

「理由は分からん！ どうも扉自体が歪んでいるようだが」

両開きの玄関扉の片方に両手を突き出し、デニンは渾身の力を込めているようだった。顔が真っ赤だ。邸内のメイドやガードマン達が来てくれないものか、左右へ視線を向けてみたものの、見えるものと言えは粉塵と瓦礫、それに中壁に開いた傷跡だけ。どうも、他に頼れそうな人間は居ないらしい。

仕方なく、彼女はデニンの反対側に回った。全力で扉を押し開けようとする。が、びくともし

ない。こんなに重い扉ではなかったはずだが。

それでも、微動だにしない扉を押し続けた。すぐ隣のデニンの薬指で、金色の小さな指環が粉塵の中、微かに輝く。それを横目で見ながら、ふと「逃げたほうがいいのではないか」という考えも浮かんだ。この事態の原因、それは現在では検討もつかない。だが、単に金持ちの邸宅に賊が侵入してきただとか、そんな生易しいものではないことくらいは分かる。それこそ——災害や、絵本の中のモンスターのような、人間の能力を超越した『何か』がやってきたようにしか、思えない。

そんなことを考えていると、不意にデニンに肩を叩かれた。何やら彼女の後ろを指差している。何を、と問いかげながら振り返ると……投げつけられた（？）正門に引き裂かれた爪跡が、扉の隣まで伸びている。人が一人、出入り出来るくらいの大きさはあった。

「不幸中の幸い？」

「不幸そのものだ」

苛立たしげに返すデニンに、その通りだわ、と返しながら、彼女は爪跡に近づいた。微かな振動が伝わったのか、爪跡の近くがぼろぼろと崩れ、更に傷跡が広がっていく。外からの怒号がよりクリアになった。何やら、バタバタと人の倒れる音もする。物を取り落とすような音も。

ふと脳裏に、今朝この屋敷へ入る前にも挨拶をした、頭の悪そうな門番の顔が浮かんだ。いつもへらへらと笑いながら、ここへ来る自分に悪態をつけていた彼は、今どこに居るのだろうか。や

はり、この先だろうか。

その疑問は。

屋敷の傷から外を覗き込んだ瞬間、消し飛んだ。

眼前の光景。入り口から正門までの、約二十メートル。燦々と降り注ぐ陽光、整えられた青々とした芝生、そしてその中を突っ切るように伸びる、真っ白な砂利を敷き詰めた、馬車も通れる程の広い道。いつも通りの筈の光景だ。しかし、玄關扉から真っ直ぐに正門へ伸びているその道には——そして、芝生のあちこちには——今、何やらぼつぼつと、巨大な針のようなものが地面から突出している。そして。

数名のガードマンが、それらに体を串刺しにされていた。

彼らは皆、目を見開いて、一様に天を凝視していた。喉の底からは針の切っ先を吐き出し、口元からはダラリと舌が、そして赤黒い液体が垂れている。青い貫頭衣に同じ色のズボン、そしてその上から装着した、真っ黒な鋼鉄製の胸当ても、足元からの殺意には無力だったのだ。屈強な男達は、まるでオブジェと化したかのように、ぴくりとも動かない。そして、例の彼も、そこに居た。

いや、在った、と表現したほうが正しいだろう。

足が、何かに押さえつけられたかのように、がっちり動かなくなる。

鼓動が急速に早まっていく中、彼女は見る。屋敷を守る、十数名のガードマン。彼らは手に手に、

長い細身の剣を構え、しかしそのうち数名は既にそれを取りこぼし、腹部や肩を押さえ、大地にうずくまっている。彼らの体には鮮血が滴り、純白の砂利を染め上げる暗い赤を見れば、皆の傷が深いことは、医学に疎い彼女にも一目で分かった。

そして、それら怪我人や死人、未だ戦意を喪失せずに屋敷を守ろうとする数名の、その中央。

そこに、居たのは。

「——男の子」

目の前の、惨憺たる光景の理由。或いは、屈曲な剣士たちと敵対している筈の『モンスター』の姿。剥き出しの敵意と鮮血を一身に浴びる存在。それをはつきりと確認したとき、彼女は心の中で一人呟いた。これは何だろう、と。そうせざるを得ないほど、眼前に提示された答えは、酷くちっぽけだった。

歳は、十を満たすか否か、といった所だろう。フード付きの青い上衣、淡い空色のズボン、白い毛糸の帽子。髪と瞳は鴉の体躯のように真っ黒で、その顔つきはまだまだ丸い。可愛らしい、とすら言えるかも知れない。だが、その幼い頬や小さな体躯には、返り血らしき赤い液体が、端々にこびりついている。

「何度も同じ事を言わせないでもらえるかな」

取り巻く男達に、少年はぼそりと言った。怒りや、憎悪の調子は全くない。ぶつきら棒なその口調からは、むしろ呆れや煩わしさを感じる。だが、だからこそ、彼女の背には、冷たい何かが

走り抜けた。

余りにも、不自然だ。死の中央で、敵意の集中砲火の中で、子供が放つ言葉ではない。

「僕の用件は一つ。ツ——」

放とうとした言葉は、しかし次の瞬間、彼の頭と共に碎けて割れた。ガードマンの一人による、背後からの一撃。余りにも呆気なく、余りにも唐突な最期。

眼を離すことも出来ず、彼女はただ、それを見つめる他に無かった。死屍累々の庭先で、初めて目にした殺害の瞬間。膝は震え、喉は、肺は動きを止める。だが。

「——もう。喋ってる途中なのに」

頭を真つ二つに碎かれ、肉塊と化した筈の『それ』は、平然と口を開いた。剣に手を伸ばし、ゆくりと自身の体から引き抜きながら、背後の男を振り返る。

青くなつたガードマンが、ゆくりと後ずさる。が、次の瞬間。

「じゃま」

大地から突出した『何か』が、彼の体を一瞬で縦に貫いた。空気の鳴るような音と共に、ガードマンは口から巨大な針と血を噴き出し、空を見つめ、やがて動かなくなつた。

「なんだこれは」

隣から、デニンの声がした。壁がポロポロと崩れていくのにも構わず、彼はぼかんと口を開い

たまま、フラフラと、何かに誘われるようにして亀裂を乗り越え、陽光の下へ進んでいく。舞い上がる埃の中のその背中は、何故かひどく哀れに見えた。

その時。

ふと、アーニヤの視界に、不可解なものが映り込んだ。崩れた壁、積み上がる瓦礫の下。そこに何やら、見慣れぬものがこびり付いている。

おっかなびっくり近付いて、血を拭っている少年に細心の注意を払いつつ、亀裂の外へ顔を出す。灰色の瓦礫、そこから顔をだす変色した堅い木の柱。それに巻き付いているもの。

それはどうやら、細い蔦のようだった。蔦は屋敷の壁を這っているようで、頭上を見上げると、二階建ての石造りの館、その壁面全体に、見慣れぬ薄い緑色が無数に張り付いているのが見える。

いや、蔦だけではない。獲物を締め付ける大蛇が如く、船でも固定できそうな程の太さの『根』——緑色の、何かの植物の根が、屋敷をがっしりと掴んでいる。幾つも支流を作る大きな河のようになそれらこそが、玄関ホールの扉を歪ませていた原因らしい。

そして、それら蔦と根の源流。分化しているそれらの源を追っていくと……。

「あ。もしかして、キミがこの屋敷の責任者？」

若干現実逃避気味に植物を追っていた彼女は、不意に降ってきた声に、一瞬、体が飛び跳ねるようになった。

全ての蔦と根の先。そこに立つ血まみれの少年が、無表情にこちらを——より正確に言えば、

デニンを見つめている。少年につられてようやくこちらに気づいたのか、ガードマンの一人が顔を变えて「ここは危ない、下がって!」と叫んでくる。

だが、それは少年には逆効果だったようだ。屋敷の主人を見定めた少年は、散歩でもするかのような歩調で、平然とこちらへ足を向ける。

「初めまして。僕の名前は——」

「待てッ、止ま——」

「うるやん」

駆け出そうとしたガードマンのうちの一人が、無情な言葉と同時に、また『何か』に——アーニヤはその時、それがようやく、屋敷を掴む植物の、その根の一端であることに気が付いた——鋭く、刺し貫かれた。血飛沫が容赦なく少年に降り注ぐが、少年は意にも介さず、こちらへと歩いてくる。「ま、名前はいつか。どうせすぐ終わる用件だし」

「用件……」

「そう。あの子を返して。言ってる意味、分かるよね?」

気圧されたかのように鸚鵡返しをするデニンへ、少年は無表情に尋ねる。ガードマン達は動けない。動けば即座に絶命すること。それを彼らは、嫌というほど学んだようだ。

「僕はあるの子を取り戻しに来た。ここに居ることは分かっている。僕、あの子の位置なら大体分かるんだ」

青い上衣の前ポケットに両手を突っ込み、少年はデニンの数メートル先で立ち止まる。そして、にこりと、天使のように笑った。

「さ、どうする? 大人しく返してくればよし。そうでなければ……キミがああなるだけだ」

少年——いや、少年の姿をした『何か』はそう言っ、背後の串刺しの男達を、軽く親指で指し示した。デニンは何も言わない。後ろ姿からは察する他無いが、もはや声も出せないようだ。

『何か』も、それを悟ったらしい。彼はさも「面倒だ」とでも言わんばかりにため息をつき、小さく「もういいや」と呟いた。そして、右手をポケットから出し、デニンへとゆっくり向け——。

「はい、そこまで」

不意に、落ち着き払った女性の声が、背後から響いた。瞬間、彼女は確かに感じた。

正面にいる『何か』。それが、ただの『少年の』顔へと変化したことを。

「ツクヨミ」

名を呼ばれた、そして少年を変化させた声の主は、アーニヤを追い抜き、瓦礫を乗り越え、デニンと彼女の間を、ゆっくりと進んでいった。砂利道を音も無く歩むそれは、少年の正面まで来たところで、やはり無音で立ち止まる。

「よくもまあ、随分派手にやらかしたもんね」

目の前の光景に呆れ果てたかのように、ツクヨミ——肩高80センチはある、大きな、真っ白い毛並みの狼は、そう呟いた。流暢な、人間と全く変わらない言葉遣いは、彼女が単なる狼では

なく、魔物——人間と変わらぬ知能と言語能力を有し、獣の数倍以上の身体能力を誇る特殊な生物——であることを、如実に物語っている。

「久しぶり、ツクヨミ。元氣そうで良かった」

「はいはい、久しぶり。アンタも相変わらずね」

「……し、知り合い?」

様子を見れば明らかなる事象を、しかしはつきりと確かめたくて、彼女は前の魔物へと問いかけた。災害の一種、忌むべき殺戮者として扱われる危険な生物、魔物。それとこうして言葉を交わすのは、一般的に見れば非常におかしな状況だろう。

が、しかしそんな段階は、もう半年近く前に過ぎ去っている。だから前方の白狼は、振り向かず、いつもの調子で答えを返した。

「まあね。腐れ縁ってヤツよ」

「ツクヨミは僕のパートナーだよ。キミはツクヨミの友達?」

不意に言葉を向けられて、反射的に体をびくりと震わせた彼女だが、一方の少年はにこやかな笑顔をこちらに向けた。それは先ほど、人を手も触れずに殺害したことなど、微塵も感じさせないような、無邪気そのものの笑みだった。

「初めまして。僕はヤタ。ツクヨミを迎えに来たんだ」

それだけ言うと、用件は済んだ、とばかりに、彼は再度視線を狼へと合わせた。そして、ツク

ヨミへと手を伸ばし、告げる。さあ行こう、と。

「迎えるに遅くなるとごめんね。でも、僕も大変だったんだよ。キミの位置を把握するの

——」

「ヤタ」

少年の言葉を封じるように、狼は彼の名を呼んだ。二人の遣り取りに口を挟める者はおらず、負傷した者も、立ったまま場を静観する者も、自分も、そして前のデニンも、誰もが二人——一人と一匹の、異様な存在を見つめている。

「アンタ、来るの遅いわ。ホントに遅い。遅すぎ。笑えるくらい」

真つぐな少年の眼差しに対して、ツクヨミはため息混じりにそう言った。そして、彼から眼を離し、周囲を見回して、告げる。

「一旦出直して来て。もちろん、この状況、全部元通りにしてからね」

軽い口調で放たれたその言葉は、しかし、ヤタと名乗った少年を戸惑わせるに十分だったらしい。元通り、の意味が分からないこちらを他所に、少年は眼をぱちぱちと何度も開閉している。

「ツクヨミ?」

「こっちにも色々あるのよ。こんなに無茶苦茶にしちゃってさ、ったく。ホラ、分かったら早く——」

「本気で言ってるの?」

「ええ。大マジよ」

少年の眼が、険しくなった。デニンとこちらを微かに見遣つてから、「理由は？」と尋ねる。「理由なら、また今度伝えるわ。とにかく長い話になるから。だから、一旦出直し——」

「納得できないよ、そんなの。やっそここまで来たんだ。話くらいしてくれないと」

少年は、非難がちに訴える。事情は遙として掴めない。だが、ある程度は類推できる。

ツクヨミ、という名の魔物がこの屋敷にやつて来たのは、アーニヤがこの屋敷に雇われる少し前——約半年前のことらしい。それは、ツクヨミ自身から聞いたことだ。恐らく、間違いは無い。では、その前——半年より更に以前は、何処に居たのか。

その答えが、これなのだ。彼女はきつと、あの少年と共に居た。だから今、少年はここに来たのだ。狼と、再会するため。ただ、それだけの為に。

「珍しいじゃない。アンタがそんな風にグズグズ言うの、初めて見る気がするわ」

「冗談言つてないで。……それとも」

少年はそこで、再度——今度は、先ほどよりも遙かに鋭く——こちらへ眼を向けた。「話が出来ない理由はこの子達かい？」と、尋ねるその声は、静かな威圧に満ちている。その意味するところに、恐怖は自然と、アーニヤの体軀を強張らせた。

一方のツクヨミはというと、また呆れたようにため息をついた。どうやら、彼女にとつてこの少年は、畏怖の対象とはならないようだ。「いいから、とにかく」と、狼が口を開いた、その時。背後で、どさりと、何かが倒れる音がした。

全員で、振り返る。途端。

「ミーネー」

ツクヨミも、デニンも、そして自分も。口々に名を叫びながら、後方へ——アーニヤの後方で倒れ込んだ少女へ、駆け出した。

「馬鹿、なんで来たの！」

金色の髪、真っ白なワンピースを着た華奢な少女を、アーニヤは仰向けに抱きかかえた。少女は喉に両手を当て、掻きながら、涙を流して空を見上げている。口の端からは泡を吹き、喉の奥からは擦り切れた風のような音がする。発作だ。いつもより酷い。凄惨な光景を見てしまったツクヨミだろうか、いずれにせよ、かなり危険な状態のようだ。

待っていなさい、と叫んで、デニンが屋敷へと入っていく。

「ミーネ、落ち着きなさい。今、アンタの親父が薬を持ってきてくれるから」

デニンの行動の意図を読んで、狼は少女の瞳を覗き込んだ。ボン、と体に前足を乗せる狼に、少女は空気がかすれるような音を立てながら、辛うじて頷こうとする。

「ツクヨミ。何が——」

「いいから一旦帰つてって言つてんでしょー」

鋭く、しかし訴えるように、ツクヨミは振り返らずに叫んだ。砂利を踏む音がして、少女の背中をさすりながら顔を上げると、少年は元居た場所で、独りぼつんと佇んでいる。

その背から浴びる日差しが、彼の前に、長い影を作っていた。

「ツクヨミ」

「何度も言うけどさ。来るの遅すぎたのよ、アンタ」

狼はそこで、少年を振り返った。そして、少女の体に前足を乗せたまま、訴えるように言う。

「そう簡単に行けないんだってば」

絞るように吐き出された言葉に、少年と狼の視線が交錯する。正門からぐるりと屋敷の周囲を囲む高い灰色の塀、その先に広がる針葉樹林が、吹き抜けた風に悲鳴を上げた。

……やがて、屋敷の中からバタバタと、複数の足音が響いてきた。どうやら、デニンに加え、ようやくメイドたちも向かってきているらしい。

静かに、少年が動いた。迷い無くこちらへ向かってくる。思わずミーネを抱き寄せ、血まみれの少年を睨んだが、そんなアーニヤへ、狼は静かに首を振った。そして、じっと見つめてくる。

彼女が意図を受け取ったのと同時に、少年は歩みを止めた。ミーネと彼女のすぐ正面、陽光を遮るかのように立ち塞がる彼の表情は、逆光で闇しか見えない。

しばらくの、沈黙の後。

「分かったよ」

少年はスッと、少女に手を伸ばした。そして、ミーネの頭を軽く一撫でしてから、傍らのツクヨミへと視線を向ける。

「分かった。困らせてごめんね」

呟くように、囁くように告げる少年の声色は、ひどく静かで、寂しげだった。狼は耐え切れなくなっただかのように、視線を落とす。

また来るよ、と、少年は更に言った。そして、くるりと踵を返し、亀裂を乗り越え、一人、正門——崩れ切っていて、立派だった門柱は無残に崩れている——へと歩いていく。

彼女はその後姿を、何故かじっと見つめていた。眼が離せなかった。小さな背中が、ゆっくりと遠ざかっていく。傷だらけのガードマン達の視線を受けながら、微塵も臆することなく。

途中、彼は右手をポケットから出して、軽く地面へと振った。途端、庭に突き出ていた針が消えうせ、バサバサと、人の倒れる音が響く。……と、その時。

「アーニヤ先生？」

不意に、穏やかな声が胸の内から聞こえた。我に返ったアーニヤが、驚いて視線を腕の中へ向けると。

「先生、私……」

「あんた発作は？」

目をぼちぼちさせてこちらを見上げるミーネに、目を丸くして思わず尋ねた。つい先ほどまで、喉を押さえて悶絶していたはずなのに、今は顔色も呼吸も正常そのものだ。むしろ、普段より血色も良いように見える。

「ミーネ！ アーニヤ君、娘は——」

「大丈夫よ、心配ないわ」

上等な衣服をいよいよ埃まみれにしながら、バタバタと走ってきたデニンへ、ツクヨミが物憂げに返す。怪訝な顔をするデニンだが、ミーネが穏やかな声で「お父さま」と声を掛けると、その額に走っていた深い皺が、幾分か柔らかくなった。

彼は膝を突き、未だアーニヤの腕の中に居るミーネの頭を、大丈夫か、苦しくないか、などと言いながらそっと撫でた。頷き、微笑みを返す少女の姿に安心し、アーニヤもまた、安堵のため息をつく。

ふと、ツクヨミの姿を探した。彼女は正門へ続く道、少年の佇んでいた場所で、じっと遠くを眺めている。少年の消えた方向だ。アーニヤはデニンに少女を任せ、亀裂を乗り越えて、静かに白狼へと近づいていく。が、次の瞬間、彼女の体はまた、衝撃に強張った。

「お、よう、画家先生」

今朝挨拶をした門番が、こちらへ向かって歩いてきていた。先ほど串刺しにされていたはずなのに、腰近くまである長い髪の毛を揺らしながら、きよとんとした表情で、頭を掻いて。

彼だけではない。

串刺しとなっていたはずの、複数のガードマン達。或いは、鮮血を滴らせ、苦悶に顔を歪めていた男達。それが今、皆きよろきよと辺りを見回し、ある者は立ったまま、ある者は座ったまま、

怪訝な表情を浮かべている。

「鳩が豆鉄砲食らったような顔してる最中で悪いが、少し聞きたいことがある」

「……あなた、何で生きてんの」

「そう、それだ。是非ともその話を聞きたい」

相変わらず頭の悪そうな顔で、しかし滅法不思議そうに「オレ、さっき死んだよな？」と彼は言った。なんと返していいものか分からず、アーニヤは傍らの狼へと視線を移す。

狼は未だ、視線を遠くへ向けたままだった。崩壊し、門扉の無くなった館の入り口、その更に向こう、森へと続く一本道。恐らく、あの少年はそこを進んでいったのだろう。迷いの無い足取りで、しかし寂しげな表情で。

「ツクヨミ。結局……えっと、なに？ あなたの知り合い、一体なんなの？」

尋ねると、狼はまたため息をついた。疲れたように息を吐き出して、あー、と、何やら言葉にならない言葉を発している。

「色々端折って言うって」

しばらくして、ようやく考えがまとまったのだろう。こちらを振り向いた狼は、つまり、と前置きしてから、告げた。

「アレが私のパートナーで、何でも出来る化け物なわけよ」

意味わかんない、と、アーニヤはぼそりと呟いた。